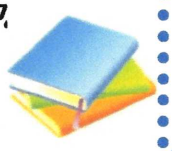
# 美味(おい)しいお話

令和元年 8・9月

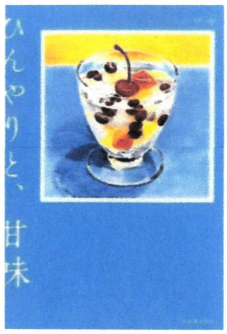
本の中に出てくる食べ物や食材が、
9/4（水）の給食に登場します。

9/4の献立(こんだて)
五目うどん、
豆腐の真砂揚げ 野菜ジュレ、
フルーツみつまめ、牛乳

***紹介した本は***
***学校図書館で展示中、***
***借りられます！***



## フルーツみつまめ→ みつまめ




おいしい文藝

### 『ひんやりと、甘味』

河出書房新社

夏休みは終わりましたが、まだまだ暑さが厳しいですね。食後のデザートやおやつに冷たいものがうれしい時期です。

この本は「おいしい文藝(ぶんげい)」というシリーズとして出されている中の一冊で、冷たくて甘いおやつについて様々な作家が書いたエッセイを集め一冊にまとめたものです。こうした何か特定のテーマや基準で作品を選んだものを「アンソロジー」と呼んだりします。

“みつまめ”がタイトルの作品は２篇。表紙の絵も“みつまめ”ですね。俳優でエッセイも人気だった池部良(いけべりょう)の「みつまめ ― そこはかとなく年の違う妹のような思い。」と芥川賞作家、吉行淳之介(よしゆきじゅんのすけ)の「蜜豆の食べ方」です。２人とももう亡くなられた方で、“みつまめ”を買って食べる思い出も昔のものですが、時期が違い、場所が違うため読み比べると面白いです。

“みつまめ”は江戸時代の末頃から屋台で売り歩かれていた駄菓子が始まりですが、明治の中頃、浅草の和菓子屋「舟和」が今のような形で器に盛ってお店で出すようになり、上品なお菓子として定着していったそうです。２篇を読むとその雰囲気が伝わってきます。

ほかにもたくさん作品が入っています。短いエッセイが中心なので気になったものから読んでみてください。

こちらもおすすめ

## 「とっておきのおやつ　5つのおやつのアンソロジー」

青木祐子・阿部暁子・久賀理世・小湊悠貴・椹野道流／著　　集英社オレンジ文庫

おやつの出てくるアンソロジーをもう１冊ご紹介します。こちらは全部で５篇の短編小説を集めたものです。『ひんやりと甘味』はすでに別の本や冊子に書かれた作品が集められていましたが、こちらはこのテーマに合わせて作家が新しく書いたものが収録されています。好きな作家がいたらぜひ手に取ってみてください。椹野道流の「おじさんと僕」は“あんみつ”をめぐる作品です。“あんみつ”は“みつまめ”に餡(あん)をのせた豪華版ですね。会社を辞めたばかりの「僕」が、突然見知らぬ「おじさん」に声をかけられ、一緒に“あんみつ”を食べてください、とお願いされます。さて「僕」はどうするのか、「おじさん」はなぜそんなことを頼むのか…。出てくる“あんみつ”の描写が詳しくておいしそう。食べたくなります。

＊イラスト、写真は、著作権フリーサイトのものを使用

（学校図書館支援員　岡田理芽）